

甲状腺外科草子 163

哲人宰相：大平正芳余話②

杉野 圭三

大平語録（前）

大平の残した多くの言葉を整理し、まとめておく。

楕円の哲学：行政には楕円形のように二つの中心があり、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張した関係にある場合に、その行政は立派な行政と言える。中略。統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由とが緊張した均衡関係に在る場合に、はじめて統制経済はうまく行くのであり、その何れに傾いてもいけない

永遠の今：時間は直線的に進行せず、過去の引力と未来の引力（互いに逆方向に働く）の均衡点に現在はある。その現在は正に「永遠の今」であって、時間は則ち「永遠の現在」ということになる。生涯の節々にその支点となっている「永遠の今」、その「永遠の今」に恵まれた決意によって身を処し、その決意によって織りなしてきた自分の人生絵巻は、自分にとっては唯一のものであって無二のものである。貴いものであり、繰り返しの効かない取替のできないものである。悔いがあるといい筈のものではなからう

秘書官の役割（素顔の代議士、1953 年）：尤も自分の適する天職に生涯恵まれるというような幸運な人は稀有なことであろう。たわいもない運命のいたずらで、仕方なしに不似合いの職業にありつのが、人の世の常のように思われる（中略）、欠点だらけの池田に仕えることで役目柄、大勢の有名無名の名士と交わりを持つことができ、その人たちの人となりをつぶさに学ぶ機会を与えられると同時に、自分が仕える大臣の長所短所を目のあたり吟味することができるということは、有難いことである。これを役得と言わずして何を役得と言うことができようか

選挙活動（素顔の代議士、1953 年）：秘書が大平に「42歳の厄年で当選するかどうかわからないのに何故代議士になろうと思ったのか？」と尋ねると「40歳の厄を迎えて思ったんだ。60歳かそこらまで生きるとすればあと20年。このまま役人生活をするより自分の力で何か世の中のためにできることはないだろうか。そういう気持ちが政界入りに踏み切らせたんだよ」と答えた。

彼は「インフレ抑制・通貨価値の維持が経済発展・道義確立の基礎で、社会秩序維持の前提であり、財政の緊縮整理を断行し“安くつく政府”を作らねばならない」と説いた。

「目先の利益を誇張して宣伝し、有権者の歓心を買うことは卑しいことであり、国民の良識がいつか厳正な審判を下す。民主主義は国民の良識を基

調に持ち、無責任な煽動が勝利を民衆の中に永久に打ち立てるようなことがあれば、私の方から民主主義との絶縁をも敢えて辞さないつもりだ」

政治家のリーダーシップ（青年との対話、1965）

人間というものは、労苦よりも安逸を求め、生活の低きよりも高きを求めたがるものである。政治がこの人間の本能に迎合して御機嫌をとるばかりでは、その人のためにならないばかりか、国家と社会を破滅に導くことになる。その破局を避けるためには、人に真実を訴え、困難を説き、それ相当の犠牲を求めなければならない。このことがマッシーニ（19世紀、イタリアの社会思想家）のいう賢明なリーダーシップというものではあるまいか

わが党の外交政策（1966年）

外交というものは内政の外部的表現である。内政が確立しないですぐれた外交ができるものではない。何事にも絶対ということがないように、安全保障にも絶対的な安全保障はあり得ない。安保条約の問題にしても軍事的側面はその一面、しかも補足的一面にすぎないのであって、問題をより広い視野から取り上げなければならない

政治不信（黒い霧事件1966）：政治家自らが責任と義務を自覚して、その行動に真剣な反省を加えつつ、政治に対する信頼を培っていくことが肝心であり、政治家は検事でもなく、議会もまた裁判所であってはならない。最終的解決は検察当局と裁判所に委ね、その公正な判断と措置にまつべきである

財政硬直化の3K（コメ、国鉄、健保）問題（衆議院代表質問、1968）：硬直化要因を子細に検討すると、その禍根は財政金融の分野にとどまらず、広く制度や慣行の中に深く根を下ろしていることが判然とする。（中略）真の解決の要諦は、言うまでもなく政府の勇断であり、これを理解し受容するであろう国民の英知である。もはや国民は甘い迎合的な政治の姿勢に顔をそむけつつあると私は考える。私は政府に対し、真実は真実として、これを国民に伝え、困難は困難として、これを国民に訴える率直な態度を要求する

四十日抗争：第三十五回衆議院総選挙で自民党が前回より一議席減らし過半数に達しなかった時、大平辞任を求める声があがった。大平は知人の忠告にも耳をかさず、断固辞任を拒否。大平は争いを好まない性格で他者に対して極めて寛容だったが、原則がかかっている場合は頑固なまでに非妥協的であった。

大平の座右ノート：ラ・フォンテーヌの次の言葉が書かれていたという。

「邪悪の者には絶えず戦いをすることだ。平和そのものは甚だよろしい。私も賛成だ。しかし、それが何になろうか、信義を譲らぬ敵に対し」

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2026年1月8日